

# 研究者の心的連関に焦点を当てたデータ分析

——シュプランガーの理論に基づく尺度構成を題材にして——

教育心理学コース 酒 井 恵 子

An Analysis Focused upon Investigator's Mental Context :

Construction of a Scale Based on Spranger's Theory as an Illustration

Keiko SAKAI

The main purpose of this study was to show influence of investigator's individuality upon investigation of personality. In a process of construction of mental function scale based on Spranger's theory, which consists of 6 subscales (economic, aesthetic, theoretic, religious, social, political), unexpected highness and lowness of correlations between items were interpreted in light of the mental context of the investigator.

## 目 次

### I 方法論

I - A 研究者自身の心的連関を解明することの重要性

I - B 予測に反する現象の解釈：二つのアプローチ

### II 分析の実際

II - A 筆者の研究の概要：データの収集まで

II - A - 1 問題と目的

II - A - 2 研究の手続き

II - B 予測に反する結果の分析：データの整理と解釈

II - B - 1 「予測に反する結果」の抽出：データの整理

II - B - 2 研究者自身の尺度得点

II - B - 3 研究者の心的連関に注目したデータ解釈

### III 本アプローチの意義

#### I 方法論

I - A 研究者自身の心的連関を解明することの重要性

パーソナリティ研究とは、研究者という一つの人格が人格一般について理解しようとするプロセスであり、個

別的特殊性に制約された研究者の主観が、他者の主観のもつ個別的特殊性を記述しようとする試みである。従ってこの研究領域においては、研究者自身の人格的な個性が研究に及ぼす影響はことに重大であり、研究者の自己理解の質は、研究全体の質をも左右する。このことは心ある研究者ならば誰でもよく承知している事柄であると思われるが、舞台裏のこととして論文の表面には現れない場合が多いため、ともすればその重要性が忘れられ、おろそかにされてしまう危険性がある。

他者理解において、理解者は自身の個性が及ぼす影響に対して自覚的であるべきだという考え方は、例えば心理療法の諸理論においては極めて基本的な考え方である。心理療法家が教育分析を通じて自己理解を深め、自分の他者一般への反応特性を予め知っておくこと、そして面接に臨んでは自分の患者に対する逆転移感情に充分注意を払い、患者との間にどのような相互作用が生じているかを意識化することが、患者の抱える問題を正しく理解する上で欠かせないとされている。

このことは、実証的な調査研究等においても全く同様に言える。例えば質問紙調査について考えてみると、研究者は質問紙を媒介として被験者から様々な情報を引き出そうと試みるわけであるが、被験者の回答とは研究者の設定した質問項目に対する応答であり、研究者の理論の枠組みによって予め方向付けられている。従って、研究者自身が今まで考えたことのないような問題や、了解

できないような現象は、その研究者が作成した質問項目によって拾い上げることはそもそも難しいと言える。仮に研究者の予測を超える情報がデータの中に含まれていたとしても、データを集約し解釈するのも研究者自身である。一般に人間は、得られた情報の中から自分自身の仮説に沿った事実だけを見出しがちだということは、社会心理学の諸研究がすでに指摘している通りである。研究者が他者の中に自己の反映を見ることに満足せず、自身の主観的な認識の制約を克服し、他者の他者性を正しく理解したいと望むのであれば、自分がどのようなことには関心が持て、どのようなことには関心が持てない人間であるのか、また、どのようなことは理解でき、どのようなことは理解できない人間であるのかについて、できる限り自覚するよう努めなければならない。

自分がどのようなことを理解できない人間であるかを理解するということが、いかに困難であるかは論じるまでもないが、目標に少しでも近付くために、研究者はどのような努力をすればよいだろうか。まず研究者は、自分にはまだ理解できていない事柄が存在しているのだということを常に厳しく自覚することから始めるべきであろう。そして、自分の予測を裏切るような意外な現象に遭遇した際には、特別な注意を払い、決して見逃さないことが重要であると思われる。なぜなら、予測に反する現象は、研究者に新たな知識をもたらしてくれるだけでなく、はずれた予測の根底にある、研究者の知識構造の偏りについてもヒントを与えてくれるからである。

#### 1-B 予測に反する現象の解釈：二つのアプローチ

仮にある調査において予測に反する結果が得られ、しかもそれは単なる技術的・操作的な問題によるのではなく、どうやら仮説そのものに修正すべき点があると思われる場合を想定してみよう。例えば、「風が吹けば桶屋が儲る」という仮説の真偽を確かめようとして調査を行った結果、風がふいても桶屋が儲らないケースが圧倒的に多く、サンプルの採り方や測定の方法を色々と変えてみてもやはり結果は同じであった場合、発想の道筋としては、二通りのアプローチが考えられるだろう。まず、「風が吹いても桶屋が儲らないのはなぜか」と考えてみるのが第一のアプローチである。このアプローチでは、自分が当初想定していた因果連鎖を再検討し、事実と事実の結び付け方を変更したり、今まで見落としていた要因を新たにモデルに組み込んだりして、調査結果と矛盾しないような事実連関モデルへと組み立て直す、という作業が行なわれる。これに対して第二のアプローチとは、「それでは、自分はなぜ『風が吹けば桶屋が儲るはずだ』

と思っていたのだろう」と考え、その仮説が自分自身の心的な諸連関とどのように関わり合っているかを解きあかす、というやり方である。すなわち、仮説と現象との食い違いについて考察する上で、現象の側のコンテキスト（事実連関）に目を向けて説明しようとするのが前者、仮説の側のコンテキスト（研究者の心的連関）に注目して説明しようとするのが後者であると言える。本論の主要な目的は、後者のアプローチの持つ意義を示すことにある。

筆者が研究者の心的連関の方に注目することの第一の理由は、予測に反する結果は研究者がその事実連関を十分に捉えていない場合に生じやすいのだから、自分にとって不案内な事実連関の土俵の上をおぼつかない足どりでさまようよりも、自分にとって身近な、自分自身の心的連関を手がかりにしながら進む方が、より堅実な方法に思われる、ということである。自分自身の心的連関を読み解く場合には、自分で「腑に落ちる」とか「腑に落ちない」という実感を手がかりに用いることができる。例えば、「こう説明すれば一見もっともらしいけれど、今一つぴんとこない」とか、「どうも自分は結論を焦って無理やりこじつけようとしているようだ」等、推論の“確からしさ”を直観的に判断できるのは、自分自身を分析対象とする場合ならではのメリットと言えよう。第二の理由は、研究者が自らの心的連関の特質を自覚しない限り、調査等を通じて得たせつかくの新しい知識も、偏った視点から解釈され吸収されて、知識構造の偏りを正す役には立たず、誤りが再生産される危険が大きい、ということである。自分自身がどのような発想の偏りを持ち、どのような予測の誤りを犯しやすいかについての知識が増すことによって、研究者のものの見方、仮説の立て方が改善され、同種の誤りを繰り返さずに済む。第三の理由は、自己の心的連関の解明と事実連関の解明とは相補的な関係にあり、前者が進歩することで後者もまた同時に進歩することが期待できる、ということである。すなわち先ほどの例で言えば、研究者がそれまで「風がふけば桶屋が儲るはず」と信じていたとすれば、そこにはそれ相応の理由や裏付けがあったはずである。研究者にそう信じさせた諸連関が十分に明らかになれば、「研究者には儲りそうに思われたにも関わらず、実際には儲らない」という矛盾を統合し、研究者の認識世界と現象世界とを包括するような、より高次の説明原理が浮かび上がってくる可能性があるのである。

但し、当然ながらこのアプローチにも問題点がある。「自分が何を理解できないかを理解する」ことを重視する前節の立場を貫き、このアプローチを採用することに

よって生じる問題点についても予め指摘しておこう。まず、研究者自身の心的連関の解明は、研究者の直観力・内省力を頼りに進められるものであり、それらの能力が乏しい場合にはそもそもこのアプローチは成り立たない。仮に研究者が十分な能力を持ち、研究者自身としては自分の心的連関をうまく説明できたと感じたとしても、それを言葉にして他者に伝達するのがまた一苦勞である。仮に他者に正確に伝えることに成功したとしても、心的連関に関するそれらの説明や解釈は、多くは本人しか知らないような私的な諸事実から成り立っており、果して妥当なものであるのかどうか、研究者以外の人間が吟味し批判的に検討することが難しい。研究者自身も、自分の解釈と矛盾する事実を隠しておきたくなる気持や、安易なこじつけ的な説明でごまかしてしまいたい気持と、常に格闘しなければならない。

これらの問題は、第二のアプローチが主観を取り扱うものであるだけに、他者と共有することが困難であるという点に集約できよう。(裏返せば、第一のアプローチの強みは、他者との共有のしやすさにあると言える。)本来共有しにくいものを少しでも共有するために研究者は、私的な体験世界を、ありのままに、しかも公共性を持つ分かりやすい言葉で記述すること、そして、自分の説明や解釈そのものだけでなく、それらの根拠となった心的事実をも明示し、他者が批判的に検討できるだけの材料を提供することを心がけるべきであろう。第Ⅱ章においては筆者自身の研究を題材に、「予測に反する現象を研究者自身の心的連関の解明を通じて解釈する」というアプローチを実際のデータ分析に適用していくが、その際、極力上記の原則に従うように努めるものとする。その結果を踏まえて第Ⅲ章では、このアプローチの意義について、改めて考察を加えることにする。

## Ⅱ 分析の実際

### Ⅱ-A 筆者の研究の概要：データの収集まで

#### Ⅱ-A-1 問題と目的

シュプランガーは、人間が他者の精神作用を有意義なもの・有意味なものとして了解できるのは、全ての人間の精神において普遍的な意義法則(意味法則)が働いているからであるとした。意義とは価値に結びついたものであり、従って基礎的な価値種類から基礎的な精神作用種類が導き出されるべきだとするシュプランガーは、経済・美・理論・宗教・社会・権力という6種の普遍的価値に対応して、経済的精神作用・美的精神作用・理論的精神作用・宗教的精神作用・社会的精神作用・権力的精

神作用という6つの基礎的な精神作用形式(モチーフ)を想定した。シュプランガーによれば、精神生活のどんな小さな断片の中にも、強弱の差こそあれ、6種全てが働いており、ある精神作用のみが孤立した形で立ち現れることはあり得ないとされる。従って、人間が実際に観察することのできる個々の精神現象とは、それらのモチーフが複雑に錯綜したものあって、ある精神作用そのものの純粋な姿は、ただ理念として想定することができるだけである。即ち、精神作用の6つの基礎形式とは、あらゆる精神現象の中に働いているにも関わらず、それそのものを直接見ることはできないという、いわばプラトンのイデア的な性質を持っている。シュプランガーは精神のもつこのような法則性を、「規範的法則」と呼んでいる。

筆者の研究の目的は、ある個人の精神生活の中で、この6種の精神作用のいずれがより顕著に認められるかを測定する尺度を作成することである。この研究において最も困難な点は、6種の精神作用そのものの純粋な姿は誰にも見ることができず、当然筆者も筆者自身の個別的特殊性によって制約された「自分なりのイメージ」を持つに過ぎないという点にある。これらの精神作用を測定するための質問項目を作成する際にも、筆者が作成する限りは筆者自身の個性によって色づけされた項目とならざるを得ない。従って筆者は、自分が最初に作成する尺度は著しく偏った不完全なものであること、そして、この先改良に改良を加え普遍性を高めるよう努めても、決して完全なものとはなり得ないことを覚悟しなければならない。尺度を作成し改良していく過程とは即ち、各精神作用の本質を忍耐強く追求し、他者および自己の個性を理解するための、より普遍的妥当性の高い見地を求めていく過程でもある。従ってこの研究においては、研究者自身の個別的特殊性のもたらす認識上の制約に気づいていくことは、特に重要な意義があると言える。

#### Ⅱ-A-2 研究の手続き

##### a 理論の学習

まず、シュプランガーの著書“Lebensformen”(邦訳『文化と性格の諸類型』<sup>1)</sup>)の中の、6種の価値および精神作用に関する言及を読み、筆者の個人的な経験を思い出しながら、6種の精神作用に関する自分なりのイメージを構成した。シュプランガーは6種の精神作用の本質について、様々な角度から描写し考察を加えているが、それぞれの純粋な姿は誰にも知り得ないという理論の性質故にであろうか、シュプランガー自身が端的に明確に定義している箇所は見当たらない。ここでは、現時点で筆者の理解している範囲において、それぞれの精神

作用について簡単に紹介するにとどめる。

経済的精神作用：役に立つもの・立たないものを区別し、最小の損失で最大の利益を上げようとする。美的精神作用：ものの特徴を直観的に感じ取り、その印象を表現へと形成しようとする。理論的精神作用：現象の中から普遍的な本質を抽象しようとする。宗教的精神作用：自分がこの世界において生きることの全体的な意義について考えること。社会的精神作用：他者を愛し他者と共感し合おうとする。権力的精神作用：自己の意志を貫徹して、他者に影響力を及ぼそうとする。

#### b 面接調査

次に大学生・大学院生36名を対象に半構造的な面接を行い、興味関心・対人関係・自己評価・過去の印象深い経験等について回答を求めた。筆者とは異なる個性をもつ他者が、筆者自身が日頃あまり経験しないような心の動きについて語るのを聞き、シュプランガーの記述の中でよく理解できなかった箇所のうちのいくつかについて、「ひょっとすると、こういうことを指していたのかも知れない」と思い当たるなどして、筆者が当初持っていたイメージに追加や変更が加えられた。

#### c 質問紙調査

面接調査における被験者の発言の記録を参考に、各精神作用を端的に表現するような言い回しを収集して項目化し、さらに、面接の中で各精神作用が特に発達していると思われた被験者（各精神作用ごとに2～3人ずつ）の助言を仰ぎ、より実感に即した表現になるよう改善し、各精神作用12項目ずつ、計72項目からなる5件法の質問紙を作成、大学生・大学院生414名に実施した。項目の内容については、後出の表3を参照のこと。

### II-B 予測に反する結果の分析：データの整理と解釈

#### II-B-1 「予測に反する結果」の抽出：データの整理

今回の質問紙調査の主目的は、6種の精神作用を測定する尺度を作成することであり、筆者が作成した72項目の一つ一つが、各精神作用を測定する項目として適切であるかどうかを評価することである。この72項目は、筆者が各精神作用を測定するのにふさわしいと考えて作成したものであるから、この場合「項目の内容が適切である」というのが「予測」に相当すると見なすことができる。

各精神作用の純粋な本質は知ることができないため、究極的には定義不可能であるという制約から、項目の内

容が適切であると言えるための条件もまた明確ではない。しかし、もしこれらの72項目が全て理想的な項目によって構成されていると仮定するならば、少なくとも次の2条件を満たすであろうと考えられる。①同じ精神作用を測定する項目相互の間に、高い相関関係が見られること（収束的妥当性）：例えば経済的精神作用を測定する12項目は、経済性という共通の要素を含んでいるはずであるから、相互に相関が高いと予測される。②ある精神作用を測定する項目は、他の精神作用を測定する項目とは相関関係が見られないこと（弁別的妥当性）：シュプランガーによれば6種の精神作用形式は、精神現象を理解する上で「必要にしてかつ十分」な構成要素として想定されたものである。従って、理念的には相互に独立なものであるのが妥当であろう。以上の2条件が満たされたとすれば、各精神作用を測定する12項目がある意味的なまとまりを持ち、しかも他の精神作用とは区別される独自の意味を持っていると考えられ、72項目の内容が適切であることの一つの傍証と見なすことができる。逆に、調査の結果がこれらの2条件に著しく反していた場合、例えば同じ精神作用を測定するはずの項目どうしの間になんら相関関係が認められなかったり、別種の精神作用を測定するはずの項目間に高い相関関係が見られる場合は、項目の内容が不適切である可能性がある。

以上のような観点から、次のような分析を行なった。まず、同じ精神作用を測定する項目として作成した12項目の合計得点を、各精神作用の仮の尺度得点と見なし、6種の精神作用尺度の平均値・標準偏差・ $\alpha$ 係数、および尺度間の相関係数を算出した。結果を表1・表2に示

表1 6種の精神作用尺度の平均値・標準偏差・ $\alpha$ 係数

尺度名	平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数
経済的精神作用	38.8	7.8	.74
美的精神作用	41.6	7.3	.70
理論的精神作用	39.9	6.9	.68
宗教的精神作用	36.4	7.2	.66
社会的精神作用	42.1	6.3	.67
権力的精神作用	40.2	6.6	.71

表2 6種の精神作用尺度の間の相関関係

	美	理論	宗教	社会	権力
経済的精神作用	.09	.30*	.02	.06	.34*
美的精神作用		.19*	.49*	.26*	.33*
理論的精神作用			.12	.12	.42*
宗教的精神作用				.44*	.06
社会的精神作用					-.01

\*  $p < .01$

す。次に、この6つの尺度と、72項目それぞれとの相関係数を求めた。そして、ある項目を適切な項目と見なすための基準として、①その項目が属している精神作用尺度との相関係数が.3以上で、且つ、②それ以外の5つの精神作用尺度との相関係数が全て.3未満である、という2条件を定め、72項目のうち、2条件を両方とも満たすものを「適合項目」、①を満たさないもの（当該尺度との相関が.3未満のもの）を「孤立項目」、②を満たさないもの（当該尺度以外の尺度とも.3以上の相関があるもの）を「重複項目」と名付けた。（①②のいずれも満たさない項目、即ち、当該尺度と相関がなく、それ以外の尺度とのみ相関がある項目は、存在しなかった。）各精神作用毎の適合項目・孤立項目・重複項目の内容および、各項目と当該尺度との相関係数を、表3に示す（重複項目については、どの精神作用の尺度とどの程度の相関が見られたかも併せて示してある）。そして、孤立項目と重複項目とを「研究者の予測に反する項目」と見なし、解釈の対象とした。

#### II-B-2 研究者自身の尺度得点

解釈を行なうに先立ち、今回筆者が作成した尺度で、筆者（研究者）自身を測るとどうなるかを示しておくことは意味があると思われる。6つの尺度による筆者の得点（12～60点）および、被験者414名の平均および標準偏差を用いて標準化した得点（平均0、標準偏差1）は、次の通りである。

経済：38点(-0.10) 美：49点(1.02)

理論：38点(-0.28) 宗教：56点(2.73)

社会：50点(1.24) 権力：38点(-0.33)

これらの尺度は筆者が作成したものであるから、シュプランガーの言う6種の精神作用そのものを測るものではなく、筆者の理解しているところの各精神作用を測定するものである。さらにこれらの得点は筆者自身の回答によるものであるから、結局これらの得点は、筆者の設定した座標空間において、筆者自身がどこに位置づけられているか、即ち、筆者が筆者自身をどのように捉えているかを反映していると言えよう。これらの数値によれば、筆者は自分自身について、宗教・社会・美が高く、権力・理論・経済が低いと考えていると解釈できる。これらの数値は、この質問紙を作成し自分で回答した時点での筆者の自己認知には、かなりよく一致している。が、今回の調査を行なったことの影響もあって筆者の視点に変化が生じ、筆者の自己認知もまた変化したため、現在測定するとやや違った結果になるかも知れない。筆者の視点の変化の問題については、以下のデータ解釈の中でも言及する。

#### II-B-3 研究者の心的連関に注目したデータ解釈

以下のデータ解釈では、まず孤立項目または重複項目の内容を提示し、その項目と当該尺度との相関係数の他、重複項目については重複している相手方の精神作用尺度との相関係数を示し、さらに相手方の12項目のうち、その重複項目と.2以上の相関が見られた項目およびその相関係数を併せて示す。なお、項目番号に付した\*印は、筆者が逆転項目として作成した項目であることを表す。

これらの情報をもとに各項目について解釈を行なうが、その際、第I章で述べた二つのアプローチとはそれぞれどのような作業を指すかと言えば、例えば「経済」の孤立項目について、「この項目が測っている性質と、他の項目の測っている性質との間に、質的な違いがあるのではないだろうか。他の項目にあって、この項目にない要素とは何だろうか」と考えるのが第一のアプローチであり、「なぜ自分はこの項目を、経済的精神作用を測るのにふさわしいと考えたのだろうか。自分の中で経済的精神作用とはどのようなものとして捉えられ位置づいているのだろうか。自分はなぜそのような捉え方をしていたのだろうか」と考えるのが第二のアプローチである。二つのアプローチは相互に補完し合うものであるため、以下の分析においては、まず最初に第一のアプローチによって解釈し、さらに第二のアプローチを導入することによって自己理解並びに現象理解を深めるという手順を踏む。即ち、「調査結果に基づけば、Aのような事実連関が考えられる。自分ははっきりBのように考えていたが、それは自分がこれこれの経験を持った、このような人間だからだと思われる。両者を総合すると、経済的な精神作用とは、Cのようなものとして捉え直すのがよいようだ」という洞察を得ることが期待されるわけである。

##### a 経済的精神作用

##### 【孤立項目】

(37) 「これ以上がんばっても効果は少ない」と判断したら、早々に手を引く。

「経済」尺度との相関： $r=.26$

シュプランガーは、経済的人間とは「効用性の価値を第一とする人」であり、「彼は資源、エネルギー、空間、時間等を節約するが、それは、それらから最大量の効果のあがる働きを収めるためである」と述べている。(37)は、無駄な時間や体力を費やさずエネルギーを節約しようという経済的な要素を確かに含んでいると思われるのに、他の項目との相関があまり高くないことの理由が、筆者には理解できない。項目それ自体の内容を検討することで、相関が低く出ることの理由を捜そうとする第一のアプローチは、ここで限界に突き当たる。

表3 各精神作用毎の適合項目・孤立項目・重複項目

## a 経済的精神作用

## 【適合項目】

- (1)ちょっとした待ち時間や移動の時間も、なるべく有効に使う。(58)
- \* (7)あまり損得や利害にはこだわらない。(-.39)
- (10)重要な仕事で忙しい時には、どうでもいいことはどんどん切り捨てる。(36)
- \* (25)時間をあまり気にしない方である。(-.56)
- (28)人よりも計画性のある方だと思う。(69)
- \* (43)一日や二日ぼんやりと過ごしても、べつに時間の無駄だとは思わない。(-.44)
- (46)やるべきことの優先順位を考えながら行動している。(63)
- (55)こまごまとした用事は、なるべく短時間でさっさと片付けてしまう。(56)
- \* (61)特にスケジュールを考えないで行動していることが多い。(-.66)

## 【孤立項目】

- (37)「これ以上がんばっても効果は少ない」と判断したら、早々に手を引く。(26)

## 【重複項目】

- (19)新しい事を始める時は、手間ひまに見合う利益があるかどうかよく考える。(54)〈権力：.30〉
- (64)将来必ず役に立つ知識や技術は、多少無理をしても学んでおく。(39)〈理論：.31〉

## b 美的精神作用

## 【適合項目】

- (2)身のまわりの小物などを買う時は、色やデザインにこだわる方だ。(44)
- (11)周囲の人を、ちょうど美術品でも鑑賞するような目で眺めることがある。(40)
- \* (26)芸術にはそれほど関心がない方だ。(-.58)
- (38)目の前の出来事を、ドラマの一場面のように見立てて楽しむことがある。(41)
- \* (44)あまり自分の感情を表現しない方だ。(-.41)
- (47)自分の趣味やセンスに合うもの・合わないものを、直感的に区別する。(39)
- (56)比喩的な表現をよく用いる。(49)
- \* (62)きれいな景色を見ても、人よりも早く飽きてしまう方だ。(-.46)
- (65)時には歌ったり楽器を弾いたりして、自分の感情

表3 つづき

を発散する。(48)

## 【重複項目】

- \* (8)物を見て感動したり感激したりすることは、少ない方だ。(-.60)〈宗教：-.37 社会：-.32〉
- (20)なにげない光景に、深く感情を揺さぶられることがある。(63)〈宗教：.44〉
- (29)ものの特徴をうまくとらえ、言葉・身ぶり・絵などで生き生きと表現する。(59)〈権力：.37〉

## c 理論的精神作用

## 【適合項目】

- (3)初めて見る物は、それが何という物で、何に使う物か、確かめたい。(53)
- (12)何かを説明する時は、頭の中で要点を整理し、筋道を立てて話そうとする。(50)
- (21)ものの仕組みや原理に興味を持つ方だ。(63)
- \* (27)人と話しているうちに、最初とは逆のことを言ってしまうたりする。(-.41)
- (30)ある事柄について、全部を理解しないと気がすまない時がある。(39)
- (39)人の話にあいまいな点や矛盾している点を見つけると、とても気になる。(44)
- \* (45)あまり論理的にものを考えようとしめない方だ。(66)

(48)試験勉強では丸暗記は避けて、因果関係や必然性など、本質を理解する。(47)

- \* (63)何か疑問を感じても、わざわざ調べたり確かめたりすることは少ない。(-.52)
- (66)雑多な物事の中から、法則性や規則性を発見するのが好きである。(65)

## 【孤立項目】

- \* (9)実は見る人によって違うので、どれが本当かは決められないと思う方だ。(-.21)
- (57)小説を読む時は、細かい描写はざっと流し、話の本筋を読み取ろうとする。(24)

## d 宗教的精神作用

## 【適合項目】

- (31)不平や不満を捨て、完全に静かな心境に到達しようとして努力している。(46)
- (40)自分が何か大きな力によって守られ、生かされていると感じる。(67)

表3 つづき

- (49)「自分は何のために生まれてきたのだろうか」と考える。(47)
- \* (52)神仏に祈って救いを求めたりするのは、無意味だと思う方だ。(53)
- (67)自分の苦しみや悲しみなど、広い世界の中では小さな事と、笑い飛ばせる。(35)
- \* (70)宗教心や信仰心とは、縁がない方だ。(54)
- 【孤立項目】
- \* (16)何もかもがくだらないと覚えることがある。(17)
- \* (34)何となく、しらけた気持でいることが多い。(23)
- 【重複項目】
- (4)人の知恵の及ばない、大きなものの存在を感じる時がある。(63)＜美：.31＞
- (13)喜びも苦しみも、深く純粋に味わおうとする。(46)＜社会：.42 美：.40＞
- (22)人の運命の不思議さを、しみじみと覚えることがある。(56)＜美：.35＞
- (58)追いつめられると、自分でも信じられないような不思議な力がわいてくる。(41)＜美：.34＞
- e 社会的精神作用
- 【適合項目】
- (5)自分自身のためよりも、誰かのために働く方が、やりがいがある。(48)
- (14)人の生き方を見て、「立派だなあ」「素敵だなあ」と憧れることが多い。(45)
- \* (17)他人を冷えきった目で眺めることがある。(31)
- (23)人が苦しんでいる姿を見ると、自分までつらくなってしまう。(53)
- (32)人と心が通い合う瞬間が、何よりも幸せである。(59)
- \* (35)嫌いな相手のことを、無理にわかろうとはしない。(45)
- (50)自分が人から言われて傷つくようなことは、人にも絶対に言いたくない。(43)
- \* (53)同情は、するのめされるのめ嫌いである。(39)
- (59)喜びは、ひとり占めするより、みんなで分かち合った方が楽しい。(55)
- (68)人の話を聞いて、「自分と似ているな」と親しみを覚えることがよくある。(42)

表3 つづき

- \* (71)他人の内面には、あまり関心を持とうとしない方だ。(46)
- 【重複項目】
- (41)人が成長していく姿を見ると、感動する。(58)＜宗教：.40 美：.31＞
- f 権力的精神作用
- 【適合項目】
- (6)いいかげんな規則や気まぐれな命令に振り回されるのは、がまんできない。(37)
- (15)他人の指示を待つよりは、自分自身の判断に従って行動する。(47)
- (33)大した実力もないのに、すぐに命令口調でものを言う人には、腹が立つ。(32)
- \* (36)他人に指示や命令を下すのは、気がすすまない。(56)
- (42)人から反対されても、自分の方針はあまり変えない。(47)
- (51)ライバルには絶対負けたくない。(46)
- \* (54)他人のすることには、なるべく口出ししない。(40)
- (69)他人に対して、断固とした態度がとれる。(58)
- \* (72)勝ち負けには、あまりこだわらない。(47)
- 【重複項目】
- \* (18)他人に抗議したり反論したりするのは、苦手である。(67)＜理論：-.34＞
- (24)人をあつかうのはうまい方だ。(50)＜美：.33＞
- (60)人と議論する時には、相手をうまく説得しようとする。(50)＜理論：.42＞

注1：\*は、筆者が逆転項目として作成した項目であることを意味する。

注2：項目末尾の( )内の数値は、その項目と当該尺度との間の相関係数である。

注3：重複項目については、どの精神作用とどの程度の相関が見られるかを＜ ＞内に示した。

そこで、自分がこの項目を作る時にどのようなことを念頭においていたかを思いだしながら、この項目をじっくり眺めていると、「早々に手を引く」というあたりがどうも気になってくる。筆者が「経済的な人」として念頭に置いている人々は、即断即決、てきぱきと仕事をこなす人々である。決断力が乏しく迷いやすい筆者としては、彼らと一緒にいると、何となくせきたてられるような感じや、置いてきぼりにされそうな不安な感じを持つことがしばしばある。「早々に手を引く」という言葉は、実は筆者が彼らに「早々に手を引かれてしまう」感じを、主客を入れ換えて表現したものであり、「ぐずぐずしていると見限られて置き去りにされてしまうのでは」という筆者自身の不安な気持ちが込められているように思う。

実は、この項目を作成してから現在に至る一年の間に、筆者はかなり「経済的」な人間へと変化し、以前のように、自分がどうしたいのか分からずにぐずぐずと迷ったり悩んだりして時間を浪費することが少なくなった。(先に挙げた筆者の「経済」の尺度得点も、現在回答すればもっと高い値になると思われる。) このことは、筆者が現在青年期から成人期への転換期にさしかかっており、モラトリアムから脱皮し、一人前の研究者になることを目標に、研究最優先の生活を始めたことと関係していると思う。目標がはっきりとしていれば、物事の重要度や優先順位はおのずと定まり、判断を下すことはそう難しくない。経済的な人をはたで見ているだけでなく、自分自身が経済的に振舞うようになってみると、経済的価値とは常に手段的価値であり、効用性の大小、役に立つ・立たないの区別は、目標・目的があってはじめて決まるということが、よく理解できる。以前の筆者が効率よく経済的に振舞うことができなかったのは、自分の目標が定まっていなかったためではないかと考えている。

筆者が自分の中で発展しつつある経済的な側面を活性化しながら(37)を読んでみると、「確かに手間ばかりかかって大して為にならないと思えば、さっさと手を引くかもしれないけれど、たとえ勝算は薄くても、ひょっとしてうまくいった場合の利益がとて大きかったり、さほど労力を要しない仕事だったら、駄目でもともと、うまく行けば儲けものというつもりで、やってみるだけの価値はある、と判断することも有り得るから、いつでも早々に手を引くとは限らない」ということになり、回答としては「どちらとも言えない」を丸で囲むことになるのではないと思う。確かに損失は小さい方がよいが、損失を避けることばかり考えていると利益が上らず、かえって効率が悪くなることはよくある。シュプランガーが「効用と損失の均衡」という言葉で表現しているのは

そのようなことであり、何が利益であり損失であるかは、その時々によって変わってくるのだと考えられる。

#### 【権力との重複項目】

(19) 新しい事を始める時は、手間ひまに見合う利益があるかどうかよく考える。

「経済」尺度との相関： $r=.54$

「権力」尺度との相関： $r=.30$

「権力」の項目のうち、(19)と.2以上の相関がある項目：(24)/ $r=.26$ , (51)/ $r=.22$ , (72)/ $r=-.21$ , (18)/ $r=-.20$

この項目も、「効用と損失の均衡」を図る経済的発想を表わそうとしたものであり、確かに「経済」の他の項目との相関は高いが、同時に「権力」とも相関が見られる。(19)と相関のある「権力」の項目はいずれも、「他人より優位に立ちたい」「他人に勝ちたい」という要素を含むものである。経済的な動機から他者よりも多くの利益を得ようという競争心が生まれ、権力的な動機へと接近していく場合があることは、シュプランガーも指摘しているし、また一般に「甲の損は乙の得」と言われるように、利益を上げるためには、他者との綱引きに勝たねばならないという事態はしばしば見られる。「何かをやる以上は、首尾よく成功(勝利)を収めたい」というパフォーマンス重視の姿勢は、おそらく経済的なものと権力的なものの境界線上に位置するのであろう。

ただし、経済的なものは、権力的なもの以外の、美・理論・宗教・社会ともそれぞれ境界線を持っている。筆者が経済的なものを表わす典型的項目を作ろうとしたにも関わらず、権力との境界線上のものができあがったのはなぜかを明らかにすることが、第二のアプローチの課題となる。筆者から見て経済的な人々は、他者からの誘いや依頼があった時に、「今は忙しいから」「あまり関心がないので」と、自分の予定や利害に基づいて断わることをあまり恐れないように見える。シュプランガーは「純粋に経済的な人間は利己的である」という。無論現実には、経済的な人々が常に利己的に振舞うわけではないが、他者との付き合いや、他者へのサービスは、「できる時にできる範囲で」という限定付きだという感じは受ける。おそらく日本人の多くがそうであるように、筆者もまた「わがままを言わず、他人の気持を考えて行動せよ」という規範の下で育ち、自分自身の都合よりも他者の意向を尊重しなければいけないと考える所がある。その筆者の目から見ると、自分のメリット・デメリットを考えるという経済的発想と、他者と対決してでも自己の主張を通そうとする権力的な動機とは、いずれも「自分中心」の姿勢であり、両者は非常に似通って見える。



筆者の中の「経済」のイメージがやや「権力」寄りになるのは、両者がはっきり分離していないためだと思われる。

そんな筆者にとって、経済的ではあるが権力的ではないと思われるある人の、次のような言葉は、大いに理解の助けになった。「自分にとって目的が何であるかはさほど重要ではないし、特定の目標にこだわる気持ちもあまりない。与えられた諸条件の折り合うところを見つけて、方法の最適化を図ることに関心があるだけだ。」つまり経済的な人にとっては、目標・目的は、何も無ければ始まらないが、中身は何でもよく、場合によっては自分ではなく他人の目的のために合理的な方法を見繕うことによっても、ある種の充実感が得られるらしい。(ただ優先順位としては自分の目的の方が先になるようである。)それに対し純粋に権力的な人にとっては、自分自身の目標を達成し、自分自身が勝利を収めることこそ重要で、その手段として経済的な方略を用いても、合理化・省力化そのものにやりがいを感じるわけではないと推測される。経済と権力の差異を端的に言うならば、前者は「合目的性の追求」であり、後者は「目的意識の強さ」であると表現できるであろう。もしも権力的なものの混入しない、純粋に経済的な表現を追求するとしたら、「利益」「成果」等の、目標の達成に力点を置いた表現は避け、「もとを取る」「割に合わない」といった、目標と手段、利益と損失の均衡の感覚をまるごと含んだ表現を用いるのがよいのではないと思われる。

#### 【理論との重複項目】

(64) 将来必ず役に立つ知識や技術は、多少無理をしても学んでおく。

「経済」尺度との相関： $r=.39$

「理論」尺度との相関： $r=.31$

「理論」の項目のうち、(64)と.2以上の相関がある項目：(63)/ $r=-.31$ , (66)/ $r=.24$ , (21)/ $r=.20$ , (30)/ $r=.20$

「役に立つ」という言葉は、効用性を追求する経済的な発想を表わすものであるが、項目全体として体系的に知識を獲得するというニュアンスがあるために、理論的なものに接近していると考えられる。

筆者の観察の対象になったのは主に大学関係者であり、学業が主たる目標であることは共通の前提であるため、経済的な人として筆者がイメージするのは「計画性のある勤勉な勉強家」が多いこともあり、筆者の中で経済的であることと理論的であることのイメージがだぶっており、このような項目が生まれたように思う。

経済的であるが理論的ではないと思われるある人がこ

の項目を見て、「自分なら、“将来”ではなく“今すぐ”役に立つ知識の方が大事」と述べた。「将来」というと、現実の問題に対処するという経済的なニュアンスよりも、「知識体系を築き上げていく」という理論的なニュアンスが強まるのかもしれない。また、「知識を学ぶ」と言う理論的な色彩が強いので、「技術を身につける」などとするべきかもしれない。

#### b 美的精神作用

##### 【宗教との重複項目】

(20) なにげない光景に、深く感情を揺さぶられることがある。

「美」尺度との相関： $r=.63$

「宗教」尺度との相関： $r=.44$

「宗教」の項目のうち、(20)と.2以上の相関がある項目：(22)/ $r=.34$ , (4)/ $r=.33$ , (13)/ $r=.29$ , (58)/ $r=.26$ , (49)/ $r=.26$ , (31)/ $r=.24$ , (40)/ $r=.23$

この項目は、「ものから受ける印象が、すなわちそれを見ている人の心の表現でもあり、ものにおいてその人自身が立ち現われている」という美的な体験を表現しようとしたものである。シュプランガーによれば、美的な体験の内容は、身の回りの個々の具象物から受ける感覚的な印象と戯れるようなものから、「神」「世界」「運命」といった抽象的で宗教的な観念に至るまで、様々なものが有り得るという。「なにげない」ものに「深く揺さぶられる」という表現が、抽象的・神秘的・宗教的な体験を連想させるために、「宗教」との相関が生じたものと推測できる。

筆者は抽象的・観念的なことを考えて深刻でドラマティックな情緒に浸るのを好む方であり、宗教的なものにも比較的関心のある方だと思う。「美」の項目の中でも(20)は筆者好みの美的体験を表わしており、筆者の宗教的あるいは神秘的なモチーフへの好みが見られているように思う。美的な感動としては、「思わず笑い出したくなる」「あら素敵、と思う」など、もっと感覚的で軽い感興もあり得るので、軽重様々な表現をバランスよく項目に取り入れるのがよいと思われる。

##### 【権力との重複項目】

(29) ものの特徴をうまくとらえ、言葉・身ぶり・絵などで生き生きと表現する。

「美」尺度との相関： $r=.59$

「権力」尺度との相関： $r=.37$

「権力」の項目のうち、(29)と.2以上の相関がある項目：(24)/ $r=.40$ , (60)/ $r=.24$ , (18)/ $r=-.24$ , (69)/ $r=.23$ , (15)/ $r=.22$

権力の項目のうち、(29)と相関のある上記の項目は、主に「他者に働きかける力」を表わした項目群である。従って(29)は、「他者にアピールする表現力」として被験者に理解されたものと推測される。シュプランガーによれば、すべての「表現」は美的なものだとされるが、「権力は常に自己を表現しなければならない」とも述べている。他者にアピールし心をつかむという権力的な動機に基づいて美的な表現が用いられる場合はよくあり、例えば(29)についても、他人の反応を見ながら面白おかしく語って笑いをとろうとしているような情景が容易に思い浮かぶだろう。従って、権力的な人が(29)に対して「当てはまる」と答える場合は少なくないと思われる。

筆者にとって、(29)が権力と相関を持つことは、非常に意外であった。筆者は、ものから受ける印象を言葉にしたり、比喩を産出したりすることは比較的得意な方だと思うが、目の前の他者に向かって働きかけをするとすると大変に苦手であり、相手を意識すると圧倒されて表現がぎこちなくなり、自分が初めに言いたかったこととはまるで違うことを思わず口にしてしまうことが多々ある。また筆者はピアノの演奏が趣味で、たまに人前で演奏する機会もあるが、演奏している最中に他者に与える効果をねらったりすると演奏そのものがだめになってしまうので、演奏中は自分の中の三半規管のような調和の感覚にひたすら耳を澄まし、聴いている人のことはなるべく意識しない方がよい。自分で良い演奏ができたと思う時にはめてくれる人がいればもちろんうれしいが、自分で感じたのと同じ欠点を指摘してもらえた場合も、自分の内的体験が単なる幻ではなく、何らかの実体を持つものであるという実感を手にすることができるので、やはりうれしい。筆者にとって他者とは、表現の受け手として、ちょうど鏡のように筆者の自己確認を助けてくれる存在であって欲しいので、自分で失敗したと思う時にはめて欲しくない。このように、他者を感じさせることよりも表現すること自体の満足感を求める筆者にとっては、美と権力とは別個の問題だという感じがする。

しかし、さらによく考えてみると、筆者の中にも権力的な動機は無いわけではない。ただ、「ほめられたい」「認められたい」という自分の気持が、何か恥ずかしいことのように思う気持があり、具体的な他者に向かって表現をしようとする、伝えたい内容よりも、むしろ「認めて欲しい」という気持そのものが相手に伝わってしまう気がして恥ずかしく、相手に何かを伝える努力そのものをやめてしまうことがある。おそらく筆者の中には権力的なものに対する強い抵抗感があって、自分自身の美的な活動の中から権力的な要素を無理やり排除しよ

うとしているために、多くの人の目には(29)は権力的な要素を含んでいると映るにも関わらず、筆者自身は権力的な側面に目をつぶってしまい、美的な側面だけを見ようとしてしまうのかもしれない。

このような筆者が、美と権力とを、誰の目にも別々のものと分かるよう区別して表現するためには、逆説的なようだが、両者は矛盾しないという事実をまずきちんと理解し、その上であらためて両者の境界を見極めていくという手順を踏むことが必要だと思われる。そのようにして(29)を見直した結果、現時点では、まず「身ぶり」とは他者の目の前で行なうことが強調されるので避けた方がよく、また特徴を「うまく」とらえるという、他者の評価を意識している感じが強まるので避けた方がよいのではないか、という改善案が出てきている。

#### 【宗教および社会との重複項目】

\* (8) 物を見て感動したり感激したりすることは、少ない方だ。

「美」尺度との相関： $r = -.60$

「宗教」尺度との相関： $r = -.37$

「宗教」の項目のうち、(8)と.2以上の相関がある項目：(13)/ $r = -.38$ , (34)/ $r = .24$ , (4)/ $r = -.22$ , (22)/ $r = -.22$

「社会」尺度との相関： $r = -.32$

「社会」の項目のうち、(8)と.2以上の相関がある項目：(41)/ $r = -.29$ , (23)/ $r = -.23$ , (59)/ $r = -.21$ , (32)/ $r = -.21$ , (71)/ $r = .20$

(8)と相関のある上記の諸項目は、いずれも感情的な振幅の大きさ、感情の深さ激しさに関わるものである。美的な精神作用とは、感情が豊かであるだけでなく、感情体験を美的な表現へと形成し感情に形式を与えることにこそ本質があり、「感動」や「感激」のみを強調すると、宗教的な感動体験や、他者とともに泣いたり笑ったりするような共感性や連帯感の深さ（社会的な精神作用）との境界があいまいになるとと思われる。

(20)に関する考察でものべた通り、筆者は美的な想像において深刻でドラマティックなモチーフを好み、「感動」「感激」という言葉にもそれが表れており、(8)が「宗教」との相関を持つことについてはそのためであろうと思う。しかし、筆者にとって感動や感情は非常に私的・個人的・内面的な経験であって、他者と共有することが困難であり、日頃感情の突発的な波に突き動かされていると、他者と共感しあうことがむしろ難しくなるという印象があるので、(8)と社会との間に相関があるというのは、あまりぴんとこなかった。だが世の中には、もっぱら場の盛り上がりの中で感情の高揚を経験するタ

イプの人も多くあり、学園祭やスポーツの団体戦など、専ら集団の中での盛り上がり指して「感動」「感激」と呼ぶ用法があることを思い起こせば、この相関関係は納得できる。「感動」「感激」という言葉に対して筆者が持っているイメージが、やや特殊であるのかもしれない、項目の中で用いる場合には慎重であるべきなのかもしれない。

### c 理論的精神作用

#### 【孤立項目】

(57) 小説を読む時は、細かい描写はざっと流し、話の本筋を読み取ろうとする。

「理論」尺度との相関： $r=.24$

シュプランガーによれば、理論的人間は事物の普遍的本質を抽象することに価値を見いだすが、抽象化の作用によって、ものそれ自体の個別的特徴は捨象されてしまうという。(57)はそのような理論的抽象作用の具体例を表現したつもりであった。これが孤立項目になったということは、理論的な人々がこの項目に対して、必ずしも「当てはまる」とは答えないということの意味している。

筆者の目から見て理論的な人々というものは、物事の筋道や仕組みのみに関心を注ぎ、物事の面白味や味わいに無頓着で、概して即物的で無感動な態度で世界に接しているように見え、物事のつじつまが合ったり、からくりが明らかになったりして、「ふむ」と納得すればそれで満足であるらしく、それ以上しみじみと味わうとか、想像をめぐらすといったことが少ないように見える。例えていえば、目の覚めるような美女を前にしながら、X線写真に写った彼女の骨格にしか関心を示さないように見えるのである。しかし、理論的な抽象作用が物事の面白味を損なうように感じて惜しいと思うのは、筆者が美的なものを重視しており個々の物独自の印象を味わうことに価値ありと感じているためであって、理論的な人々自身の文脈においては、抽象化の作用によって、認識された事柄のもつ普遍性・汎用性が高まり、価値は失われるどころか逆に増すと考えるらしい。

試みに理論的人間になったつもりで(57)を見直してみれば、「小説＝筋書き＋ $\alpha$ である」すなわち「小説においては筋書き以外の要素は誤差にすぎない」という理論を支持する場合にのみ、この項目への回答はイエスとなるであろう。「筋書き」以外の「細かい描写」の部分についても理論的分析的な関心を持ちうると判断すれば、回答はノーであろう。シュプランガーは、理論的認識とは「思惟の格子を現実の上にかぶせる」ようなものだと言っているが、同じ理論的な人でも、格子の目が粗い人と細かい人の違いがあるように思われる。筆者は

当初、格子の目が粗いタイプの理論的人間を念頭に置いて(57)を作成したが、もっと微妙できめ細かい認識力を持った理論的人間もいることが次第に分かってきた。ただ、どれほど目の細かい格子でも隙間があるので、どことなく反応がデジタルといおうか、機械的・無機的な感じはやはり共通していて、筆者にはそれが独特の乾いたおかしみや愛敬として感じられることがしばしばである。

\* (9) 真実は見人によって違うので、どれが本当かは決められないと思う方だ。

「理論」尺度との相関： $r=-.21$

筆者は当初、理論的な人とは普遍的絶対的な真理の存在を信じているものと考え(9)を作成したが、これが孤立項目になったことから、また、その他いくつかの観察事実から学んだところによれば、理論的な人々というものは、「理論化とは仮定を積み重ねていくことであって、前提が変われば結論が変わるのは当然」と考えるものらしい。「仮にPであるとすれば、必然的にQでなければならない」という論理の整合性・一貫性を重んじるのは確かであるが、論理の行き着くところが人によって違っても、立場の違いとして、それはそれでよしとする理論的人間はよく見られる。この(9)についても、(57)と同様、筆者が理論的な発想に疎いが故に生じた問題点が認められる。

### d 宗教的精神作用

#### 【孤立項目】

\* (16) 何もかもがくだらないと感ずることがある。

「宗教」尺度との相関： $r=-.17$

\* (34) 何となく、しらけた気持ちでいることが多い。

「宗教」尺度との相関： $r=-.23$

(16)と(34)相互の間にはかなり高い相関が見られるが、いずれも宗教全体との相関は低い。これらは、宗教的なものの放棄によって虚無主義が生まれるとするシュプランガーの記述に基づいて、宗教の反転項目のつもりで作成したものであるが、反転項目ではない(49)（＝「自分は何のために生まれてきたのだろうか」と考える。）との間に若干の正の相関（.31および.21）が見られた。(49)は、筆者の意図としては「自分の生きる意味を見出そうと努力する」という意味で作成したが、「生きる意味が全く無いように思われる」というネガティブな意味にも解釈できるために、(16)や(34)とも正の相関を持つのであろう。(49)以外でも、宗教の項目全体として、やや世捨て人的なニュアンスを感じさせる項目は多く、そのため、(16)や(34)のような虚無的な感じと必ずしも矛盾しないため、負の相関関係とはならなかったと考えられる。

筆者がこれらの項目を宗教の逆転項目として考えたこ

との背景(第二のアプローチ)については、重複項目の(13)に関する考察の中で、併せて論じる。

#### 【美との重複項目】

(4) 人の知恵の及ばない、大きなものの存在を感じる時がある。

「宗教」尺度との相関： $r=.63$

「美」尺度との相関： $r=.31$

「美」の項目のうち、(4)と.2以上の相関がある項目： $(20)/r=.33$ ,  $(26)/r=-.24$ ,  $(56)/r=.24$ ,  $(8)/r=-.22$ ,  $(62)/r=-.20$

(22) 人の運命の不思議さを、しみじみと感じるこ  
とがある。

「宗教」尺度との相関： $r=.56$

「美」尺度との相関： $r=.35$

「美」の項目のうち、(22)と.2以上の相関がある項目： $(20)/r=.34$ ,  $(56)/r=.29$ ,  $(11)/r=.24$ ,  $(8)/r=-.22$ ,  $(62)/r=-.22$

(58) 追いつめられると、自分でも信じられないよ  
うな不思議な力がわいてくる。

「宗教」尺度との相関： $r=.41$

「美」尺度との相関： $r=.34$

「美」の項目のうち、(58)と.2以上の相関がある項目： $(20)/r=.26$ ,  $(29)/r=.23$

これらの3項目が「美」との相関を持つことの理由は、神・霊的なものを「感じる」という辺りにあるのではないかと思う。(「不思議な力が湧いてくる」というのも、「感じ」の一種と考えられよう。)神・霊的なものは、本来五感では捉えられないはずのものである。それを「感じる」ということは、美的な想像力・形成力の働きによって、なんらかの表象化・象徴化が為された結果だと考えられる。だがシュブランガーは、偶像破壊運動を例に挙げながら、美的な表現によって宗教的なものを完全に捉えることは不可能であり、純粋に宗教的な精神は美的な形式化を拒むものだとして説明している。シュブランガーの言う宗教とは、人間には到達不可能であるところの「全きもの」との関係において、有限なる自己の存在意義を追求していくことを意味する。神・霊的なものを「感じる」というのは、宗教的なものと美的なものとの境界線上に位置しているとは言えるものの、典型的な宗教的精神作用とは言えないのであろう。

筆者は子どもの頃から、自分は人と比べて直観力・洞察力・インスピレーションのようなものが鋭い方だと自負している所があり、自分は宗教的な人間だと考え、宗教の項目を作成する際にも、自分自身の中にあるそのような面を念頭に置いていた。しかし、シュブランガーの

言う宗教性について次第に理解を深めていくにつれ、以前の筆者のように神・霊的なものを「感じる」という点にウェイトがある人は、実は純粋に宗教的な人とは言えず、宗教的なものを好んで表象化するタイプの、むしろ美的な人と言うべきではないかと思うようになった。美的な要素を排除し、純粋に宗教的なものを測る項目にするためには、人間を超えたもの、人間には見えない、分からない、捉えられないものの存在を信じ、それとの関係において生きている、という内容にすべきだと思うられる。

#### 【社会および美との重複項目】

(13) 喜びも苦しみも、深く純粋に味わおうとする。

「宗教」尺度との相関： $r=.46$

「社会」尺度との相関： $r=.42$

「社会」の項目のうち、(13)と.2以上の相関がある項目： $(59)/r=.30$ ,  $(71)/r=-.29$ ,  $(41)/r=.27$ ,  $(32)/r=.27$ ,  $(14)/r=.22$

「美」尺度との相関： $r=.40$

「美」の項目のうち、(13)と.2以上の相関がある項目： $(8)/r=-.38$ ,  $(20)/r=.29$ ,  $(29)/r=.26$ ,  $(56)/r=.23$ ,  $(62)/r=-.23$

この項目は、「人間自身のなしうることを超えて神の恩寵に与るためには、苦悩に対しても歓喜に対しても純粋である以外にない」という、宗教的人間に関するシュブランガーの記述をもとに作成したものだが、前述の「感じる」と同様、「味わう」という言葉も、ものの印象を感覚的に捉え享受しようとする美的な動機を連想させる。また、「喜び・苦しみを深く味わう」という表現は、人間関係に深くコミットすることとしても解釈できる。「美」および「社会」との相関が生じるのは、そのためではないかと思われる。

(13)を読み直して筆者自身がさらに感じるのは、「自分にはどんなことにもたじろがず全てを受け入れる用意がある」というようなヒロイックでドラマティックな気分が漂っていることである。(13)と正の相関が見られた「社会」および「美」の項目を見ると、「美」の(20)や(8)の解釈でも述べたように、ドラマティックなものに対する筆者の好みを表れており、そのために(13)と「美」・「社会」との間に相関が生じているように思う。

前述のように、(34)(=何となく、しらけた気持ちでいることが多い。)は宗教全体との相関は低く、宗教的精神作用の逆転項目としては不適切であるものの、この(13)との間には弱い負の相関を持つ。また(34)は、社会の逆転項目である(17)との相関は.46と高く、美の逆転項目である(8)との間にも弱い相関(.24)があり、宗教・

美・社会と少しずつ絡んでおり、ちょうど(13)と対照をなす項目と見ることができる。筆者は「宗教的なもの」というと、深刻でドラマティックなものを考え、自分は宗教的な人間だと考えていたので、(34)のように、白けていてあまり強く心を揺さぶられることなく冷淡に見える人は、自分の対極に位置する存在であり、世界に対して畏敬の念を持たない、宗教性の欠如した人のように思っていた。最近になって、世の中にはあまりドラマティックではない、謙虚で淡々とした宗教性というものも存在することが理解できるようになり、(34)と宗教の尺度得点との間にはっきりした負の相関が見られないのは、そのような人々が存在するからではないかと考えている。

#### e 社会的精神作用

##### 【宗教および美との重複項目】

(41) 人が成長していく姿を見ると、感動する。

「社会」尺度との相関： $r=.58$

「宗教」尺度との相関： $r=.40$

「宗教」の項目のうち、(41)と.2以上の相関がある項目： $(40)/r=.29$ ,  $(22)/r=.28$ ,  $(13)/r=.27$ ,  $(49)/r=.24$ ,  $(4)/r=.21$

「美」尺度との相関： $r=.31$

「美」の項目のうち、(41)と.2以上の相関がある項目： $(8)/r=-.38$ ,  $(20)/r=.29$ ,  $(62)/r=-.23$

シュプランガーが社会的精神作用の代表例として挙げているのは、女性の家族に対する愛である。例えば母親が子どもを見る気持ちの中には、(41)のような感動が含まれていると思われる。しかし、この項目の表現には、社会的精神作用の本質であるところの相手と自分との間の一体感や共感、相手を自分と同類のものとして見る親密感が欠けており、遠く離れたところから見ていて密かに感動を味わっているというような感じを与える。人と直接触れ合い関わり合うのではなく、一步引いて眺めるような姿勢が、観念的・抽象的という意味で宗教的な捉え方を連想させたり、美的な鑑賞の姿勢に通じるのではないかと考えられる。

筆者は項目作成当時、社会的精神作用とは他者を想うということだと考え、自分はかなり社会的な人間だと考えていた。しかし、調査結果を見て、筆者が社会的なものとしてイメージしていた内容は、必ずしも社会的精神作用の本質をついているとは言えないのではないかと思い直した。確かに筆者は、他者を想う気持ちはあっても、親密に触れ合い関わり合うことはどちらかと言えば苦手な方であり、筆者の作成した「社会」の項目全体に、「遠くから密かに想う」という感じが漂っているように思う。そのためか、重複項目となったのは(41)だけであ

るものの、「美」および「宗教」との相関が高めな項目がほとんどであった。社会的精神作用の本質を捉えるためには、例えば家族どうしの親密さや、チーム一丸となって一つの目標を目指す連帯感、仲の良い夫婦の間の結束などを思わせるような項目を取り入れていくのがよいのではないかと、現在では考えている。

#### f 権力的精神作用

##### 【美との重複項目】

(24) 人をあつかうのはうまい方だ。

「権力」尺度との相関： $r=.50$

「美」尺度との相関： $r=.33$

「美」の項目のうち、(24)と.2以上の相関がある項目： $(29)/r=.40$ ,  $(56)/r=.23$ ,  $(47)/r=.22$

(24)は、美の項目のうちの「気の利いた・センスのよい表現をする能力」に関わるものとの相関が見られた。「人をあつかうのがうまい」という言葉が、「口のうまい」「言葉巧みな」というような表現力の高さを連想させるのかもしれない。他人を自分の思い通りに動そうとすることは、明らかに権力的な精神作用である。しかし、美的な表現力に優れた被験者がこの項目を読んだ場合にも、日頃表現が上手であることで、結果として周囲の人にインパクトを与えることができ、自分は人あつかいが巧みだと感じており、「当てはまる」と答えることは有り得る。

シュプランガーの言う「精神作用」とは、普遍的な価値の体験および実現を目指すような「動機」を指すのだが、筆者は自分が権力的なものを発揮することに抵抗があるせいか、「人をうまくあつかおうとする」という、権力的動機の強さを直接的に表わす言葉では、イメージが悪くて被験者が「当てはまる」とは答えにくいのではないかと考え、その結果(24)のような、「人をうまくあつかえる」という、「能力の高さ」を測るような項目を作成した。しかしその結果、権力的な動機を持たなくても、結果として人を動かしてしまう美的な人にも当てはまるという問題が生じてしまった。やはり動機と能力とは区別して扱うべきだということを再認識した。

##### 【理論との重複項目】

(60) 人と議論する時には、相手をうまく説得しようとする。

「権力」尺度との相関： $r=.50$

「理論」尺度との相関： $r=.42$

「理論」の項目のうち、(60)と.2以上の相関がある項目： $(12)/r=.33$ ,  $(66)/r=.28$ ,  $(39)/r=.28$ ,  $(45)/r=-.28$ ,  $(21)/r=.23$ ,  $(48)/r=.22$

\* (18) 他人に抗議したり反論したりするのは、苦

手である。

「権力」尺度との相関： $r=-.67$

「理論」尺度との相関： $r=-.34$

「理論」の項目のうち、(18)と.2以上の相関がある

項目：(45)／ $r=.31$ , (12)／ $r=-.22$ , (39)／ $r=-.21$

他人と議論することに関わる上記の2項目は、理論との間に相関がみられた。「美」との重複項目の(24)の場合と同様、理論的な思考力に優れた被験者は、その結果として人と議論を戦わせることを好むので、これらの項目に対しても「当てはまる」と答えるのではないかとと思われる。

筆者は他者を前にすると緊張し、考えをまとめることが難しくなり、相手を説き伏せようというような勢いはなかなか持てない。実は論理的な思考力が足りないせいなのかも知れないのだが、自分自身では、他者を前にして腰砕けになってしまう自分の弱さ、勢いのなさの方が気になってきているので、(60)や(18)のような心情は、理論的（または非理論的）なものの現れというよりは、権力的（非権力的）なものの現れとして感じられる。筆者の中で、権力的なものをうまく発揮できないということが気にかかっているために、多くの被験者の目には権力的とも理論的とも見えるものを、専ら権力的なものと捉えていたように思う。議論・論争というものは権力と理論の境界線上のものであり、純粋に権力的なものを表わすにはそもそも不向きであるかもしれない。ただし、「相手を何がなんでも説得したい」というように、権力的な動機の部分を強調すれば、理論との関連は薄れ、権力側にシフトするであろう。

最後に、以上の分析を踏まえて項目に検討を加え、新たに作成し直したものを、参考のために示しておく（表4）。

### III 本アプローチの意義

前章では、シュプラランガーの理論に基づく調査データを素材にして、「予測に反する現象を研究者自身の心的連関の解明を通じて解釈する」というアプローチを実践した。本論中では説明を省いたが、実は本アプローチ自体、シュプラランガーが“Lebensformen”の中で展開している「理解」に関する議論に負う所が大きく、本アプローチと6種の精神作用の理論とは、実は同一の基盤の上に立つものである。シュプラランガーは6種の精神作用を、あらゆる精神現象の中に働いているにも関わらず、常に6種全てが錯綜した形でしか存在し得ないために、

一つ一つの純粋な姿を見ることはできないものとして想定した。この理論の背景には、「普遍的法則性とは直接経験できないものであり、人間が経験し得るものはすべて個別的・特殊なものである」という基本的な考え方がある。この前提に立てば、ある現象を研究しようとする者は、二重の意味で個別特殊性に制約されている。①研究者が観察の対象とする現象は、個別的・特殊な現象である、という意味において。②研究者自身の心的世界もまた、その研究者の個性による色づけや偏りを持った、個別的・特殊な認識体系である、という意味において。6種の価値に結びついた6種の精神作用という、精神の「規範的法則」を念頭におくことで、現実の精神現象を常に個別的・特殊なものとして捉えるという方法は、①の意味における個別特殊性を認識するための方法であり、また、研究者の心的連関を解き明かし、研究者の主観の持つ特殊性を自覚していくことで、より普遍的妥当性の高い見地を求め、より高次の認識に到達しようとする本論のアプローチは、②の意味における個別特殊性を克服しようとする試みであると言える。

研究者が観察対象および自身の認識体系のもつ個別特殊性を自覚するということは即ち、全ての存在を相対的なもの・不完全なものとして見なし絶対視せず、事実相互の関係性においてのみ捉えようとするということでもある。実際にこのような思考を試みるや否や、たちどころにその困難さが理解される。例えば第Ⅱ章の分析の中で、理論的精神作用を測定するはずの項目と、経済的精神作用を測定するはずの項目との間に相関が見られた場合、この事実を一般化して、「二つの精神作用の間には、実は深い関連がある」と結論すれば話は簡単である。しかし、「理念的には両者は独立であるはずだ」という規範的仮定を堅持するならば、理論の項目の中に経済的な要素が混入しているのか、経済の項目の中に理論的な要素が混入しているのか、あるいは、両者を混同しているのは研究者なのか、あるいは被験者なのか、という困惑にしばしば襲われる。シュプラランガーの理論に依拠するならば、我々が観察し経験することのできる全ての精神活動の中には、6種の精神作用の全てが同時に含まれているのであるから、項目を作成する際にも、「主として経済的なモチーフが顕著である項目」や、「理論的な色彩が濃厚な項目」というような、相対的な差異としてしか表現できないのは当然ということになる。また、大勢の被験者を対象にデータをとれば6種の精神作用がきれいに分離してそれぞれの完全な姿を観察できるというものではなく、被験者集団といえども歴史的・文化的特殊性に制約されており、普遍的なものは研究者と被験者の

表4 分析を踏まえて新たに作成した項目

## a 経済的精神作用

人よりも計画性がある方だと思う。

急いでやるべきことと、あとまわしでもよいことを見分けながら行動する。

10分や20分の空き時間・待ち時間も、なるべく有効に使うようにしている。

どうせやらなくてはならない雑用は、早めにさっさと片付けてしまう。

仕事がなるべく楽にスムーズにはかどるように、やり方を工夫する。

便利で使いやすそうな道具を見ると、すぐに欲しくなる。

現実的な考え方をする方だ。

\* 決められた期限までに仕事を間に合わせることが苦手だ。

\* 特に予定も立てずに、ぶらぶらと過ごすことが多い。

## b 美的精神作用

自分がふだん使うものは、色やデザインにこだわる方だ。

身の回りのものの形や色に、心を引き込まれるように感じることもある。

おもしろいことにすばやく気づいて、思わず笑ってしまったりする。

音楽が好きな方だ。

きれいなものを集めたり飾ったりすることが好きだ。

小説や詩など、文学に関心がある。

今の自分の気持ちや感じにぴったりの言葉を見つけようとする。

\* 美しい景色を見ても、すぐに飽きてしまう方だ。

\* 芸術的なものには、あまり関心がない。

## c 理論的精神作用

「これは何だろう」「なぜこうなるのだろう」という疑問を持つ。

ものの仕組みがどうなっているのか、興味を持つ方だ。試験勉強では丸暗記はせず、「なぜそうなるのか」という理由から理解する。

複雑なものの中から、法則やパターンを見つけだすのが好きだ。

何かおかしいことに気づくと、その原因や理由をつきとめるまで気がすまない。

表4 つづき

辞書や事典を引いたり、図鑑で調べたりするのは好きな方だ。

興味のある分野のことなら、かなりこまかいことまでよく知っている。

\* 何か疑問を感じても、わざわざ調べたり、人にきいたりすることは少ない。

\* すじみち立ててものを考えることは苦手な方だ。

## d 宗教的精神作用

自分が生きていることに感謝することがある。

この世には、人間の力をはるかにこえた、大きな力がはたらいていると思う。

人間の運命というものを感じることもある。

自分が生まれてきたことの意味を見つけないと思う。

自然と人間の関係について考えることがある。

自分はどのような生き方をするべきか、悩むことがある。

自分が生まれる前や死んだあとの世界について考えることがある。

\* 神様に祈ったり救いを求めたりするのは、意味がないと思う。

\* 宗教にはまったく興味がない。

## e 社会的精神作用

人と話していて気持ちが通じ合うと、とてもうれしい。仲間と力を合わせて、一つの目標に向かってがんばるのが好きだ。

仲間と一緒にだと、一人の時よりもずっと力が出せる。

友人を見て、「えらいなあ」「すてきななあ」と感心することが多い。

誰かが困っているのを見たら、すすんで手助けする。

人の気持ちをよく理解したいと思う。

親しい相手が喜ぶなら、何でもしてあげたいと思う方だ。

\* 人とつきあうのは、あまり楽しいと思わない。

\* 他人のことにはあまり関心がない。

## f 権力的精神作用

グループの中心になって他の人を引っ張っていかうとする方だ。

他人に対して、自分の意見をはっきり言う方だ。

自分が正しいと思うことなら、人に反対されてもやり通そうとする。

表4 つづき

良くないことをしている人を見たら、きちんと注意する。

人にものを教えてあげるのは好きな方だ。

自分が尊敬できない相手から命令されるのはいやだ。

負けずぎらいな方だ。

\* 相手がまちがっていると思っても、わざわざ反対しようとは思わない。

\* あまり自分の意見を言わないで、まわりの人に合わせて行動したい方である。

注：\* は、逆転項目として作成した項目であることを意味する。

双方を越えたところにあるということになる。これらのことは、理論的仮定としては理解できるのだが、これに忠実に従って実際にデータを解釈しようとしてみると、いつの間にか、一方を基準とみなしてもう一方を評価していたり、一方が正しくもう一方が誤っていると見なそうとしていたりして、全てを相対的に捉えるという原則からしばしば外れてしまう。人間はやはり、直接目に見えるものを基準にしながらでないと、うまく思考が進められないものであるらしい。普遍的法則という目に見えないものを規範として掲げるとするのは、実際には相当に難しいことのように思われる。

このような困難を克服し、本アプローチを実りあるものにするために必要な条件として、最後に二つのことを指摘したい。

第一に、研究者が対象および自己の個別的特殊性の錯綜の中に埋没し混乱しないためには、しっかりとした理論に依拠することが大切である。人間は普遍的・規範的法則そのものを手にすることは不可能であるが、相対的に見て、より普遍性の高い理論、より高次の認識体系というものは存在する。このような高次の見地は、ごく普通の研究者が狭い個人的経験から帰納することによって、容易に到達し得ないものであり、研究者はすすんで優れた理論に学ぶべきではないかと考える。自分の理論が百年後にも命脈を保っていると確信できる研究者は決して多くはないであろうが、百年前から生き延びてきた理論に学ぶことは、どの研究者にもできる。このような古典的な理論の持つ普遍性は、時代を越え、歴史的的特殊性を超克しているという意味で、いわば縦断的な普遍性と呼ぶことができる。研究者がこのような優れた理論と

出合い、一旦これに依拠すると定めたならば、少ない観察事実から性急に理論を修正することは慎むべきであろう。第Ⅱ章の分析においても、「6種の精神作用は、現実には錯綜した形でしか観察されないが、理念的には独立のもの」という仮定を堅持すればこそ、仮定に反する結果に基づいて、研究者の個別的特殊性について考えたり、項目内容を改善する方法を検討することもできたわけである。もし仮に、その時々調査結果に合わせて、「実際には相関がある(ない)」などと仮説を変更するならば、サンプルの特殊性および研究者自身の特殊性に翻弄されて、堂々巡りを続けてしまう危険性は大きいと思われる。

第二に、研究者の主観のもつ特殊性を明らかにする上では、他者の主観の力を借りることが有効である。研究者はまず自身の心的連関を解明した後に、自分の内省・解釈のあとを他の人がたどれるよう、公共性のある言葉で表現し、他者の目から見て、それらの解釈がどの程度合理的なものとして了解されるかによって、自分の解釈がどの程度の普遍的妥当性を備えているかを判断することが可能である。本論もまた、そのような目的を持って書かれたものである。同時代人の間で了解され共有できるという意味での普遍性は、いわば横断的な普遍性と呼ぶことができよう。

個別的・特殊なものを、全体的・普遍的なものとの関係において捉えるということは、シュブランガーの思想の根幹であるが、研究者が縦断的並びに横断的な普遍性を念頭に置き、それらとの関係において自己の個別的特殊性を自覚し、データを自らの主観が捉えたものとして扱っていくことにより、単に事実であるというだけの客観性を越えて、普遍的妥当性を持つという意味での客観性に向かって、一步一步近付いていくことができるのではないかと考える。

(指導教官 市川伸一教官)

## 引用文献

- 1) シュブランガー, E. 伊勢田耀子(訳) 『文化と性格の諸類型1・2』(世界教育学選集18・19) 明治図書, 1961 (Spranger, E. "Lebensformen" Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1922)

## 謝 辞

本論文の作成にあたり御指導いただきました市川伸一先生、南風原朝和先生、下山晴彦先生に、厚く御礼申し上げます。また、御助言をいただきました日本学術振興会特別研究員山口陽弘さん、北海道大学教育学部の伊藤亜矢子さんに深く感謝いたします。